

墓地に対する意識と生活質の評価に関する検討

—群馬県前橋市を事例として—

塚田 伸也 (前橋市 都市計画課, shinyatsukakatsu@yahoo.co.jp)

森田 哲夫 (前橋工科大学 工学部, tmorita@maebashi-it.ac.jp)

A study on evaluation of quality of life for consciousness on cemetery: A case study on Maebashi city, Gunma prefecture
Shinya Tsukada (Maebashi City Office)

Tetsuo Morita (Faculty of Engineering, Maebashi Institute of Technology)

要約

本研究は、自宅周辺の生活質の評価と、墓地の購入希望の有無、墓地を守る立場及び墓地の参拝への意識との関係性について検討したものである。墓地の購入希望の有無、墓地の参拝への意識、生活質の評価と因子分析で得られた4つの因子を潜在変数、潜在変数の下に生活質の評価を構成する各々の評価項目を観測変数として配置したモデルを構築した。このモデルについて共分散構造分析を適用して分析した結果、墓地の購入希望の有無、墓地の参拝への意識と生活質の評価の関係について定量的かつ構造的な考察を行うことができた。

キーワード

墓地, 属性, 意識, 生活質, 評価

1. はじめに

今日わが国においては、超高齢社会を迎えて今後の死者数の増加が見込まれている。国立社会保障・人口問題研究所の推計(2017)によれば、今後約20年間の死亡者数は、増加を続け、2039年から2040年にピークを迎える。死亡率は上昇を続け、2039年に15.0パーミル、2065年に17.7パーミルにも達すると推計されている。

このため、今後は高齢化に伴う終末期医療の在り方とともに、死者数の増加に伴う墓地の確保が重要な課題となると考えられる。加えて、わが国では出生率の低下や高齢者独居世帯の増加、生涯未婚率の上昇等が同時に進行しており、これまでの葬儀の形式や埋葬方法の考え方、墓地の承継や保有など墓地に対する考え方も変化し、合葬式墓地や樹林型墓地といった新たな形態を有する墓地への関心も高まっている(池邊, 2018)。墓地は人の終焉の地であるとともに先祖供養といった市民生活において重要な都市施設である。墓地に関する市民意識を探ることは、今後の都市政策を検討する上で重要な意味があると考えられる。

そこで、本研究では、墓地を守る立場や墓地の取得希望の有無といった属性を捉えつつ、お墓参りや法事のしやすさと生活質の評価との関係など墓地に関する意識構造について基礎的な知見を得ることを着眼点とした。

2. 研究方法

2.1 着眼点

本研究が対象とする墓地に関する既往研究を整理する。

はじめに、植村(1992)が行った墓地に関する将来の方向に関する一連の研究がある。この研究では、従来地

縁や血縁を柱として成立してきた墓地祭祀が、家族を単位としない、個人単位や共同祭祀、死後の平等を考えた都市型共同墓地へ移行している背景を検討している。また、鈴木・菅野(1994)は墓地設置に関する住民意識を調査し、多様な慰霊形態を受け入れ管理することによって墓地の不用意な拡大抑制策を提示している。

次に、青木・横田・大佛(1995)らが行った墓地需要の要因に関する研究がある。この研究では、墳墓取得の必要性、墓地の運営形態などを用いて墳墓の需要特性を検討している。また、青木・横田・大佛(1995)は従来の必要墳墓数の算定式を見直し、世帯特性と取得希望状況を考慮した墓地需要推計方法を提案している。金岡・柳川・島崎(1997)は東京都を対象に、コーホート分析を行うことにより墳墓の必要な世帯を推計している。さらに、横田・八木澤(1990)が行った納骨施設に関する研究は、棚式、ロッカー式等の納骨施設について、地域的な分布状況、経年的な変化、使用状況などを明らかにしている。

国外墓地の研究としては、英国における自然葬地運動など制度的な検討(武田, 2005)や場所の図式化(武田, 2007)、上田(2016)のドイツにおける樹林葬墓地の普及要因の研究がある。これらの研究は、日本における新しい墓地形態への関心の高まりに対して新たな方向を示唆するものである。以上の既往研究は、時代と墓地に対する嗜好の変化や墓地の需要、新しい墓地の形態に関する取り組みを行ったものである。

人生終わりのための活動として「終活」という言葉があるように、歳を重ねると墓地の取得希望や墓地に対する意識は生活質の評価にも強い影響を与えていると考えられるが、この関係性について検討を試みた研究があまり見られない。そこで本研究では、お墓を承継する立場といった属性やお墓の取得希望の有無、あるいはお墓参りや法

事のしやすさといったお墓に対する意識と生活質（以下、QOL と称す）の評価との関係、QOL 評価と各要素との関係を構造的に明らかにすることを目的とした。

2.2 構成及び方法

本研究では、群馬県前橋市を対象事例として行った。

前橋市は、群馬県の県庁所在地（中核市）であり、市域北部に嶺公園、市域東部に込階戸丸山霊園、市域中央部に亀泉霊園の計 3 箇所のみ営墓地を有している（2016.4 現在における区画数は 13,266 基）。前橋市でも全国における主要地方都市と同様に、今後も死者数の増加が見込まれており、これを受け入れるための墓地の確保が求められている（森田・塚田, 2017）。図 1 は、本研究の進め方について流れを示したものである。

本研究の構成について述べる。

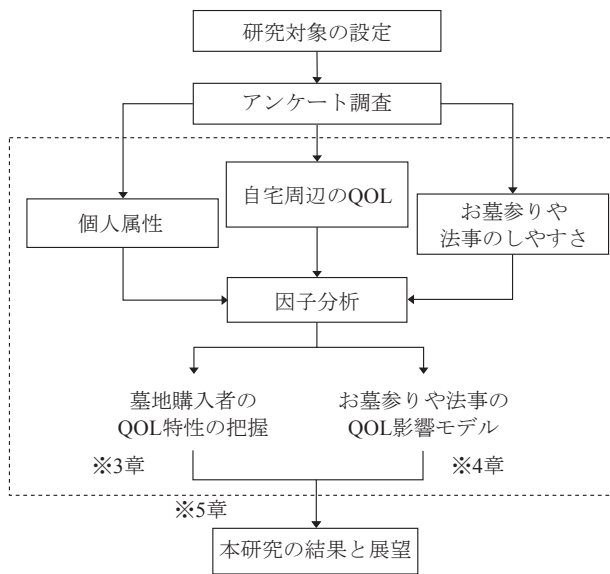


図 1：研究の進め方

はじめに本研究を進めるため、前橋市内の住民を対象に、お墓に関する意識と QOL 評価を把握するためのアンケート調査を行った（3 章）。次に、このアンケート調査から得られた QOL 評価の結果に因子分析を行い、QOL 評価を構成する代表的な因子を抽出した。続いて、抽出した代表する因子を軸として墓地の取得希望や立場といった属性別に得られた因子得点を用いてポジショニング分析を行うことにより、墓地に関する属性と QOL 評価の各要素との関係性について把握を試みた（4 章）。さらに、墓地の取得希望の有無やお墓参りや法事のしやすさといった意識と QOL 評価の関係性を明らかにするためのモデルを仮定し、共分散構造分析により分析を行うことにより、お墓に対する意識と QOL 評価の関係性について構造的かつ定量的に検討した（5 章）。以上の調査と分析した結果を踏まえて、本研究で得られた知見を整理するとともに今後の課題について考察を行った（6 章）。なお、本研究を進めていく上で以下の 2 つを仮定した。

- お墓を守る（承継）立場や墓地の取得希望の有無は、QOL を構成する各要素の評価に異なる特性がある。
- 墓地の取得希望の有無、お墓参りや法事のしやすさといったお墓に対する意識は、QOL 評価に大きな影響を与える。

3. アンケート調査

3.1 調査概要

QOL 評価やお墓に対する意識を探るために、表 1 に概要を示すとおり前橋市の市全域を対象に、2016 年 7 月 26 日から 29 日の 3 日間においてアンケート調査を行った。

表 1：アンケート調査の概要

調査対象	前橋市全域
抽出方法	2 段階抽出法：前橋市全域から 15 地区を抽出し町丁を抽出。抽出後、町丁から無作為サンプリング
調査方法	直接世帯へ配布 後日郵送回収
配布日	2016 年 7 月 26 日～7 月 29 日
配布総数	3,000 部
回収数	996 部回収 回収率 33.2 %
設問項目	<ul style="list-style-type: none"> • 個人属性 • 墓地の取得希望の有無 • お墓参りや法事のしやすさ • 生活質の評価
調査機関	前橋工科大学 地域・交通計画研究室

アンケート調査は、前橋市域全体を 15 箇所の地区に区分し、それぞれの地区から町丁を抽出した上でアンケート対象とする世帯を無作為に抽出した。調査用紙は、3,000 票をポストインし、後日に 996 票を郵送により回収した（回収率：33.2%）。

調査内容は、性別や世帯構成、居住年数などの回答者の属性のほか、「あなたは、お墓を守る立場にありますか（現在・予定）」及び「墓地の取得希望の有無」を伺った。さらに、現在における「お墓参りや法事のしやすさ」と自宅周辺の QOL 評価及び QOL を構成する複数の評価項目を設定した上で、設問について、「満足」「やや満足」「どちらでもない」「やや不満足」「不満足」の 5 つから 1 つを選択して評価してもらった。

表 2 は、郵送回収した属性を示したものである。

性別は 80.0 % を「男性」が占め、17.6 % が「女性」であった。年齢は、「70 歳以上」が最も多く全体の 39.0 % を占め、「60～69 歳」を加えた 60 歳以上の割合が全体の 68.4 % を占めた。世帯構成は、「親子の 2 世代」が 39.9 % と最も多くを占め、次いで 31.7 % が「夫婦のみ」であった。居住年数は「20 年以上」が最も多く 67.9 % を占めた。また、居住継続意向については、「ずっと住み続けたい」が 78.5 % と最も多く、お墓を守る立場（現在・予定）については「墓地を守っていく・守る予定」が 76.2 % を占めた。さらに、

表 2 : アンケート回答者の属性

性別	男性 80.0%、女性 17.6%、無回答 2.4%
年齢	～29歳以下:0.6%、30～39歳:3.9%、40～49歳:11.5%、50～59歳:13.7%、60～69歳:29.4%、70歳以上:39.0%、無回答:1.9%
世帯構成	一人暮らし:13.8%、夫婦のみ:31.7%、親子の2世代:39.9%、親子と孫の3世代:8.5%、その他:3.9%、無回答:2.2%
居住年数	1年未満:1.6%、1～3年未満:3.7%、3～5年未満:2.6%、5～10年未満:6.5%、10～20年未満:15.7%、20年以上:67.9%、無回答:2.0%
居住継続意向	ずっと住み続けたい:78.5%、市外に転居する予定である:0.7%、市外に転居したい:2.1%、考えたことない:16.1%、無回答:2.6%
お墓を守る立場	守っていく・守る予定:76.2%、ほかの兄弟姉妹などが守っている:12.1%、わからない:9.3%、無回答:2.3%
墓地の取得希望の有無	希望する:14.2%、希望しない:83.7%、無回答:2.1%

墓地の取得希望について、「購入を希望する」と答えた方は回答者全体の14.2%の割合を占める結果となった。

表3は、QOLを評価するために設定した23項目の評価項目である。項目の内容は、既往研究(森田他, 2018)を参考として「環境」「利便性」「安全性」「交流」をキーワードに設定し、各々の項目について評価してもらった。

表 3 : QOL の評価項目

A1 買い物の便利さ	A13 身近な緑に恵まれている
A2 通勤通学の便利さ	A14 身近な川、水辺に恵まれている
A3 郵便局・銀行の便利さ	A15 スポーツ・レクを楽しむ施設がある
A4 病院・福祉施設の便利さ	A16 ゴミや排水などの衛生状況
A5 公共交通の便利さ	A17 交通事故の危険性
A6 自動車の使いやすさ	A18 地震・火災などに関する安全性
A7 自転車の乗りやすさ	A19 水害に関する安全性
A8 歩きやすさ	A20 地区の防犯
A9 まちなみや家なみのよさ	A21 近所づきあい
A10 住宅や、庭のゆとり	A22 地域活動
A11 日あたりや風とおし	A23 趣味やスポーツ活動
A12 騒音・振動が少ない	AT 総合評価

3.2 QOL 評価の結果

図2はアンケート調査によるQOL評価の結果を集計したものである。図より、「満足」や「やや満足」といった肯定的な評価が占める割合が高い項目として、「A1: 買い物の便利さ(69.9%)」「A2: 通勤通学の便利さ(61.0%)」「A3: 郵便局や銀行の便利さ(68.4%)」「A6: 自動車のつかいやすさ(67.8%)」「A10: 住宅や庭のゆとり(63.6%)」「A11: 日あたりや風とおし(74.7%)」が挙げられた。

これらの項目の満足度が高い理由に、前橋市は県庁所在地であり他の群馬県内の市町村と比較して銀行など業務地が集積していること、全国的に自動車保有率が高い一方で、土地区画整理事業の住環境整備の実施率が北関東圏内でも高いため、幹線街路などの道路インフラの整備が進んでいる状況が高く評価されたものと考えられた。

一方で、「不満足」や「やや不満足」といった評価が占める割合が高い項目として、「A5: 公共交通の便利さ(37.9%)」「A7: 自転車の乗りやすさ(23.4%)」「A15: スポーツ・レクリエーションを楽しめる施設が身近にある(29.1%)」が挙げられた。これらの項目の満足度が低い理由として、前橋市は自動車利用がしやすい環境が整っている反面、バスをはじめとした公共交通の利用者が低下しており、自主運行バス路線が廃止されるなど公共交通のサービス低下が利用者の評価に顕われた原因の1つに考えられた。また、自動車利用のための道路整備が充実しているものの、自転車利用のための走行帯の整備が未熟であ

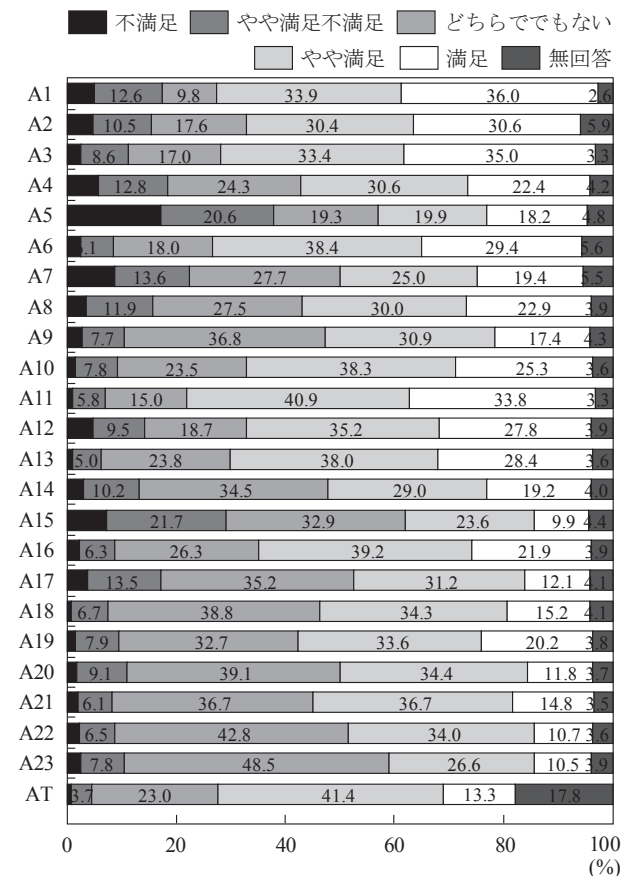


図 2 : QOL の評価結果

ることが、自転車の乗りやすさに顕われた原因の1つに考えられた。なお、「AT：総合評価」は、「満足」や「やや満足」といった肯定的な評価が54.7%、「不満足」や「やや不満足」といった評価が4.6%であり、QOLが概ね良好に評価された結果であった。

4. QOL 評価の因子特性

4.1 QOL 評価の因子抽出

表4は、QOL評価の結果について因子分析を適用することにより、QOL評価を代表する4つの因子を抽出したものである。各因子の因子負荷量の値と項目内容から、第1因子は、「A12：騒音・振動が少ない(0.788)」「A10：住宅や庭のゆとり(0.743)」「A9：まちなみや家なみのよさ(0.671)」「A13：身近な緑に恵まれている(0.651)」といった生活環境に関する評価項目における因子負荷量の値が大きいことから第1因子を「環境」と意味づけをした。

第2因子は、「A3：郵便局・銀行の便利さ(0.723)」「A：買い物の便利さ(0.713)」「A2：通勤通学の便利さ(0.703)」「A4：病院・福祉施設の便利さ(0.662)」といった、利便性に関する評価項目の因子負荷量の値が大きいことから第2因子を「利便性」と意味づけをした。

表4：因子分析の結果

項目	環境	利便性	安全性	交流
A12	0.788	0.223	0.253	0.188
A10	0.743	0.267	0.234	0.212
A9	0.671	0.306	0.270	0.210
A13	0.651	0.315	0.263	0.220
A11	0.598	0.241	0.346	0.186
A8	0.525	0.457	0.335	0.219
A15	0.513	0.432	0.371	0.194
A14	0.456	0.371	0.385	0.230
A3	0.217	0.723	0.221	0.184
A1	0.153	0.713	0.147	0.135
A2	0.218	0.703	0.166	0.148
A4	0.246	0.662	0.195	0.179
A6	0.365	0.588	0.219	0.131
A7	0.399	0.573	0.306	0.173
A5	0.440	0.452	0.234	0.148
A18	0.385	0.303	0.702	0.216
A17	0.474	0.293	0.617	0.240
A19	0.412	0.368	0.579	0.326
A16	0.476	0.324	0.503	0.167
A21	0.386	0.358	0.310	0.792
A22	0.460	0.370	0.323	0.485
A20	0.461	0.349	0.376	0.465
A23	0.071	0.330	0.283	0.421
因子負荷量	5.158	4.553	2.913	1.838
寄与率	23.45%	20.69%	13.24%	8.35%
累積寄与率	23.45%	44.14%	57.38%	65.73%

同様に、第3因子は、「A18：地震・火災(0.702)」や「A17：交通事故の危険性(0.617)」など安全性に関する評価項目の因子負荷量の値が大きいことから第3因子を「安全性」と意味づけ、第4因子は、「A21：近所づきあい(0.792)」や「A22：地域活動(0.485)」など、交流に関する評価項目の因子負荷量の値が大きいことから第4因子を「交流」と意味づけをした。

4.2 属性にみる QOL 要素の評価特性

年齢を「60歳未満」と「60歳以上」、世帯構成を「2世代又は3世代居住」と「2世代又は3世代居住以外」、居住年数として「20年未満」と「20年以上」、居住継続意向として「ずっと住み続けたい」「ずっと住み続けたい以外」、お墓を守る立場(現在・予定)として「墓を守る立場」と「墓を守る立場でない」、墓地の取得希望として「希望ある」と「希望ない」、生前の墓地の購入意向として「生前購入意向ある」と「生前購入意向ある以外」に区分して属性別の因子得点の平均値を「環境」「利便性」「安全性」「交流」の因子別の軸にマッピングすることによってQOL評価の各要素から捉えて特性把握を行った。

図3は、X軸に「環境」、Y軸に「利便性」を軸に、それぞれ属性別に得られた因子得点の平均値をマッピングしたものである。図より「居住20年以上」「ずっと住み続けたい」「生前購入意向あり」「お墓を守る立場以外」が「居住20年未満」「ずっと住み続けたい以外」「生前購入意向なし」「お墓を守る立場」よりも「環境」や「利便性」を高く評価している傾向が把握できた。また、「墓地取得希望あり」が「墓地取得希望なし」よりも「利便性」を高く、「環境」を低く評価している傾向が把握できた。

図4は、X軸に「安全性」、Y軸に「交流」を軸に、それぞれ属性別に得られた因子得点の平均値をマッピングしたものである。図より「居住20年以上」「ずっと住み続けたい」「お墓を守る立場以外」が「居住20年未満」「ずっと住み続けたい以外」「お墓を守る立場」よりも「安全性」や「交流」を重視している傾向が把握できた。また、「生前購入意向あり」「墓地取得希望なし」が「生前購入意向なし」「墓地取得希望あり」よりも「安全性」を高く、「交流」を低く評価している傾向が把握できた。

5. 墓地に対する意識と QOL 評価の関係

先に設定した仮定を検証するため、QOL評価と属性及びお墓に対する意識、QOLを構成する要素の評価の影響についてモデルを構築した。モデルは、観測変数である「墓地の取得希望(有無)」「お墓参り・法事(しやすさの評価)」が「QOLの総合評価(潜在変数)」に影響を与え、「QOLの総合評価(潜在変数)」が因子分析で得られた「QOLの4つの因子(潜在変数)」に影響を与え、さらに4つの因子(潜在変数)の下にQOL評価の各々の評価項目を観測変数として配置したMIMICモデル(Multiple Indicator Multiple Model)とした。なお、潜在変数として設定したQOLの4要素の下には因子負荷量が0.48以上の評価項目を観測変数として配置した。

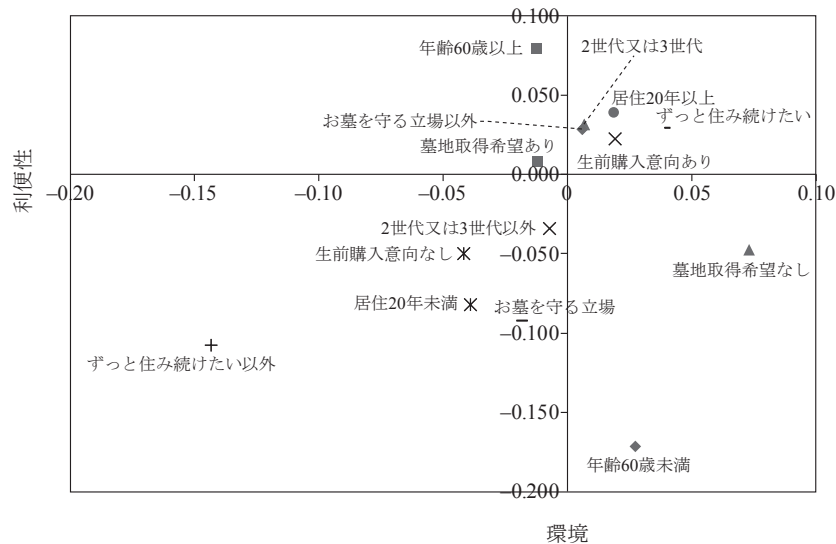


図3：ポジショニング分析（環境－利便性）

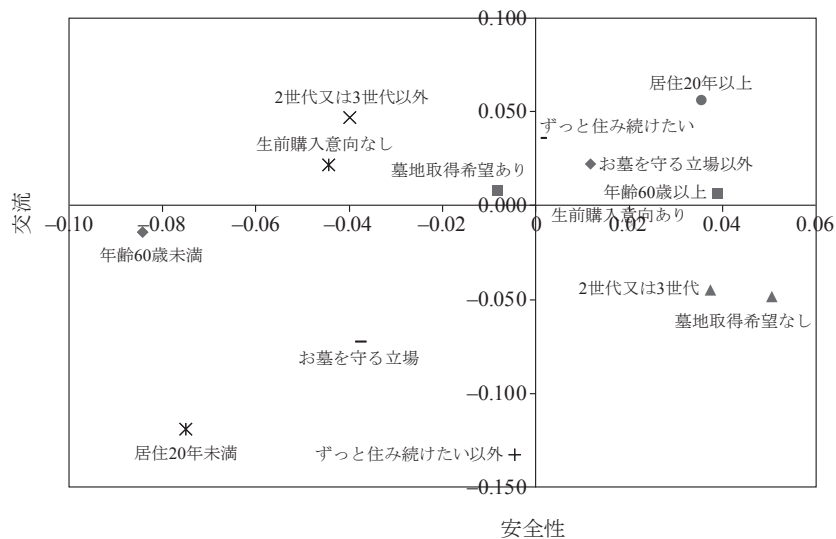


図4：ポジショニング分析（安全性－交流）

図5は、仮定したモデルについて共分散構造分析によって分析した結果を示したものである。分析結果については、適合度を示すGFIは0.853、AGFIは0.816であり、値が0.9に満たないものの、おおむね良好な結果が得られた。

まず、観測変数である「墓地の取得希望」「お墓参り・法事」と「QOLの総合評価」の関係では、図中の標準回帰係数の値から「墓地の取得希望 (0.067)」「お墓参り・法事 (0.636)」であり、ともに正の影響が示された。また、「QOLの総合評価」と因子分析で得られた4つの因子の潜在変数では、パス係数の値より、「安全性 (0.972)」の影響が最も強く、次いで「環境 (0.961)」「交流 (0.960)」「利便性 (0.811)」と影響を与えていることが分かった。

4つの因子として設定した潜在変数と各々の評価項目として設定した観測変数との関係では、「環境」に「A12: 騒音・振動が少ない (0.816)」「A13: 身近な緑に恵まれて

いる (0.816)」、「利便性」に「A4: 病院・福祉施設の便利さ (0.819)」、「安全性」に「A18: 地震・火災などに関する安全性 (0.850)」「A19: 水害に関する安全性 (0.836)」、「交流」に「A20: 地区の防犯 (0.878)」「A21: 近所づきあい (0.831)」が強い影響を与えていることが分かった。

6. まとめ

6.1 結果の考察

本研究では、自宅周辺のQOL評価について属性や墓地の取得希望の有無、及び居住継続意向やお墓参りや法事のしやすさなどの意識の関係性について検討したものであり、結果から以下の知見を得ることができた。

はじめに、1つ目の仮定の「お墓を守る (承継) 立場や墓地の取得希望の有無によって、QOLを構成する各要素の評価に異なる特性がある」である。本研究では、前橋市を事例にQOL評価を行い、評価結果に因子分析を適用

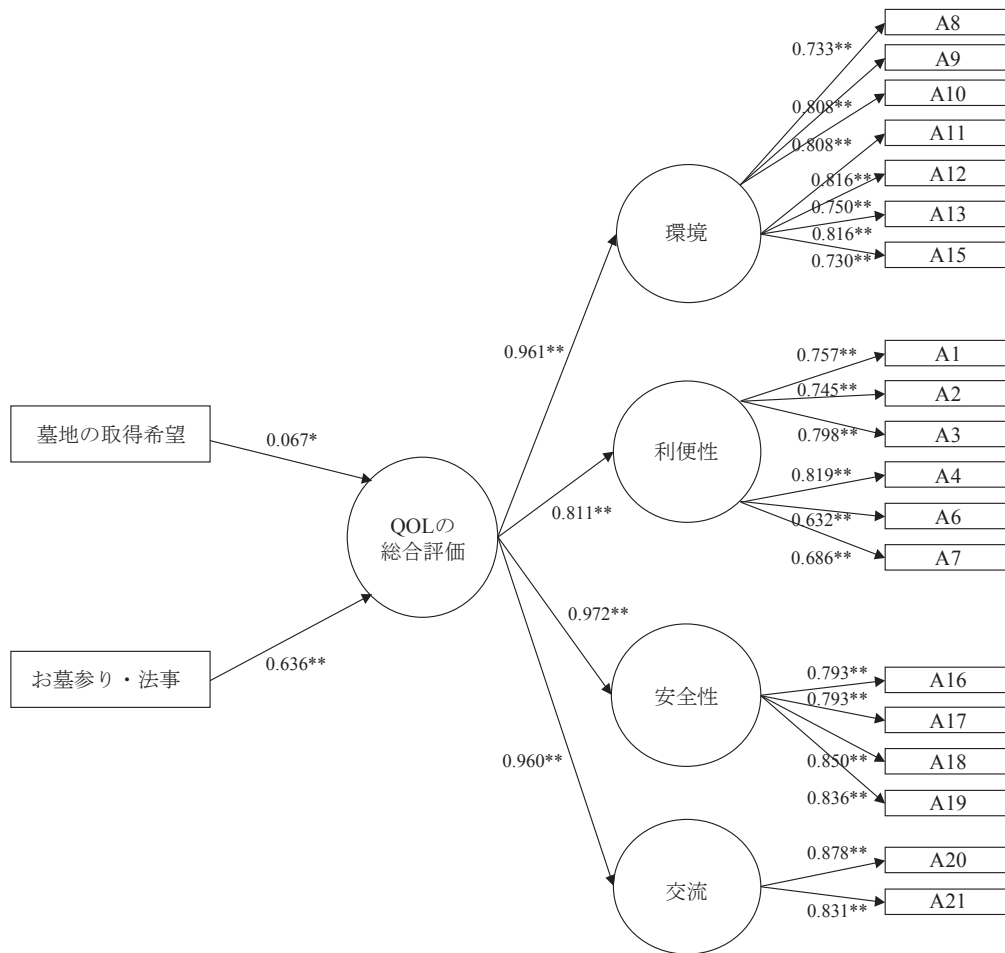


図 5：共分散構造分析による結果

注：GFI: 0.853, AGFI: 0.816, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$.

することにより、「環境」「利便性」「安全性」「交流」の4つの代表的な因子を抽出した。

4つの因子を軸として、属性別に得られた因子得点の平均値をマッピングすることにより、「居住20年以上」「ずっと住み続けたい」「お墓を守る立場以外」が、「居住20年未満」「ずっと住み続けたい以外」「お墓を守る立場」よりもQOL評価の4つの因子「環境」「利便性」「安全性」「交流」のいずれの要素を高く評価している傾向が把握できた。また、「60歳以上」「墓地取得希望あり」が「60歳未満」「墓地取得希望なし」よりも、「環境」よりも「利便性」、「交流」よりも「安全性」を高く評価している傾向を把握することができた。

この結果から「お墓を守る立場」は、「居住20年以上」「ずっと住み続けたい」のように能動的な行動や意識と異なり、「お墓を守る立場以外」と比較した場合にQOL評価に影響を与えていない状況が把握できた。また、「お墓を守る立場」は「60歳以上」と同様に、他地区への移動制約を背景に、「環境」よりも「利便性」を、「交流」よりも「安全性」を高く評価している傾向を把握することができた。

次に、2つ目の仮定の「墓地の取得希望の有無、お墓参

りや法事のしやすさといったお墓に対する意識は、QOLの評価に大きな影響を与える」である。本研究では、アンケート調査で得られた「墓地の取得希望の有無」と「お墓参り・法事のしやすさ」、「QOLの総合評価」と「QOLを構成する4つの因子」と「各項目の評価結果」の関係をモデルとして構築し、共分散構造分析により分析を行った。その結果、「QOLの総合評価」には、「墓地の取得希望の有無」「お墓参り・法事のしやすさ」が影響を与えており、中でも「お墓参り・法事のしやすさ」が「墓地の取得希望の有無」よりも影響を及ぼしている可能性が示された。また、「QOLの総合評価」には、身近な緑に恵まれているなどで構成される「環境」や病院・福祉施設の便利さなどで構成される「利便性」が強い影響を与えることから、「環境」との相乗効果が期待できる樹林葬墓地の施設計画や、「利便性」という点においては、病院・福祉施設と墓地とのルート経路の交通再編といった総合的な都市政策の実践が「QOL評価」を高める上で効果的ではないかと考えられた。以上のように、本研究では当初に設定した2つの仮定を定量的に検証するとともに結果について政策的な考察を行うことができた。

6.2 今後の課題

本研究の課題としては、「お墓を守る（承継）立場にある人」は、「お墓を守る立場にない人」よりも QOL を高く評価していない結果が得られた点である。この結果の背景に考えられた事項としては、横村（1992）が行った墓地の方向に関する一連の研究が示すように、従来地縁や血縁の中で成立してきた墓地が、家族を単位としない、個人単位、共同祭祀、死後の平等を考えとした志向性へ変化している影響も考えられた。この原因究明及び「お墓参りや法事のしやすさ」という意識に QOL の総合評価に強い影響を与えている個別の具体的な要因の解明を今後の研究課題としたい。

引用文献

- 国立社会保障・人口問題研究所. 日本の将来人口推計（平成 29 年推計. http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp_zenkoku2017.asp. (2017.12.30 閲覧)
- 池邊このみ (2008). 増加する墓地需要と樹林葬による自然再生, ニッセイ基礎研 REPORT, 10-17
- 横村久子 (1992). 家族形態及びライフスタイルの墓・墓地についての意識, 造園雑誌, Vol. 55, No. 4, 309-314.
- 鈴木雅和・菅野博貢 (1994). 都市近郊における墓地設置に関する住民の意識比較と計画のあり方. 造園雑誌, Vol. 57, No. 5, 169-174.
- 青木義次・横田睦・大佛俊泰 (1995). 墳墓需要に関する要因分析. 日本建築学会計画系論文集, No. 60, 75-83.
- 青木義次・横田睦・大佛俊泰 (1995). 多様な取得状況を考慮した必要墳墓数の推計. 日本建築学会計画系論文集, No. 60, 57-66.
- 金岡毅・柳川一博・島崎敏一 (1997). 東京都における必要な墓地数の予測. 土木学会年次学術講演会講演概要集 第 4 部, Vol. 52, 296-297.
- 横田睦・八木澤壯一 (1990). 納骨施設の現状からみた, 東京都区部における墓地以外の祭祀空間に関する考察. 都市計画学会学術研究論文集, Vol. 25, 259-264.
- 武田史郎 (2005). 英国における自然葬地運動とその制度的枠組の発生および発展プロセス. ランドスケープ研究, Vol. 68, No. 5, 809-812.
- 武田史郎 (2007). 英国自然埋葬地における「場所」の図式化. ランドスケープ研究, Vol. 70, No. 5, 507-510.
- 上田裕文 (2016). ドイツの樹木葬墓地にみる新たな森林利用. ランドスケープ研究, Vol. 79, No. 5, 537-540.
- 森田哲夫・塚田伸也 (2017). 地方都市における市営墓地の需要把握に関する課題. 都市計画論文集, Vol. 52, No. 3, 451-458.
- 森田哲夫・早川まい・湯沢昭・塚田伸也・森尾淳・杉田浩 (2018). 東日本大震災仮設住宅退去後の居住地選択意向に関する研究—宮城県石巻市を事例に—. 社会技術論文集, Vol. 15, 65-75.

relationship with consciousness of settlement awareness and QOL evaluation around the house. QOL evaluation and attribute, QOL assessment and tomb awareness, and four factors obtained by QOL evaluation and factor analysis as latent variables, a model in which each evaluation item constituting the QOL evaluation under the latent variable is arranged as an observation variable was assumed. By applying covariance structure analysis was applied to this model, it was possible to obtain basic knowledge on quantitative and structural characteristics of the relationship between QOL evaluation and attributes, and the relationship between QOL evaluation and tomb consciousness.

(受稿 : 2018 年 10 月 28 日 受理 : 2018 年 12 月 20 日)

Abstract

This study examined the attributes of respondents, and the rela-